The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「と」の気脈 : 平安和文における、発話／地／心内の境
Author(s)	加藤, 昌嘉
Citation	詞林. 2006, 40, p. 14-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67555
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「と」の気脈

――平安和文における、発話／地／心内の境――

加藤　昌嘉

前田愛・山田有策らによって編まれた『全集樋口一葉』（小学館）は、作品中の発話文と心内文に初めて鉤括弧を付した実験的テキストである。編者による本文整定の手は、さらに句読点・ルビ・段落分けにまで及んでいるが、そうした処理は、一般読者が一葉作品を音読して味わうことを配慮してのものだと言う。蓋し、一葉の文章作法を視覚的に顕在せしめたという点でも、このテキストの功績は大きい。

翻って、平安時代の日記や物語が活字化される場合はどうか[1]。発話文に鉤括弧を付すことこそ一般化しているものの、心内文については、地の文との峻別は不可能（不要）との意見があって、特に『源氏物語』の注釈書では、鉤括弧を用いないものが増えている。しかし、その訳注はと言うと、整定本文と乖離した曖昧な解釈を目にすることが多いだけに、改めて、平安和文の気脈に即したパンクチュエイションを摸索してみたくなる。厳密な区分けは不可能ということと、分析が可能か否かということは、おのずと別の事柄に属する。

一、《「…」と、「…」》型の発話文

発話の閉じ目、心内の閉じ目を示すマークの一つに、助詞「と」がある。引用の助詞と呼ばれるものだが、平安和文におけるその用法は、時に、現代人に違和感を覚えさせることがある。まずは、一人物の発話の狭間に「と」が割り込む、《「…」と、「…」》型の文を摺撫してみたい。

【用例1】『落窪物語』巻四

内裏に参りて奏し給ふ、「これなむ、翁の、限りなく愛しとおぼえ侍る。思し召して顧みさせ給へ。兄の童に思しませ。官を得さすとも、兄にはまさらむ」**と**、「すべて、この子を太郎にはせよ」と、常にのたまひて、御名も弟太郎となむつけ給へりける。

（『角川ソフィア文庫　落窪物語㊦』一〇九頁）

【用例2】『うつほ物語』祭の使巻

殿守、「げにさなむものしたまふ。何かは許し聞こえたまはざらむ。そがうちにも、殿守ら侍れば、御願ひも必

ず叶へたてまつりはべらむ」と、「さはありとも、また御消息聞こえたまへ」といふ。

（『新編日本古典文学全集　うつほ物語①』四八四頁）

市販の校注テキストから、任意の二例を挙げた。

【用例1】は、太政大臣［主人公の父］が、溺愛する孫［二郎君］について述べた発話。太政大臣の言が連続していると読まれるのだが、それを分断するように、助詞「と」が置かれている。注釈書によって解釈の相違があるようだが、角川ソフィア文庫が、「太政大臣は、『…』とか、『…』とか、常におっしゃって」という形で訳出しているのが穏当だろう。中村幸弘＋碁石雅利が、この《「…」と、「…」》型の文を、《〜に〜に》型の文や《〜を〜を》型の文とともに「同種格並立の構文」と称したのも、同様の把捉と思われる。[3]

一方、【用例2】は、帥［滋野真菅］に対する、殿守［あて宮付きの古参女房］の発話。殿守の言が連続していると読まれるのだが、それを分断するように、助詞「と」が置かれている。[4] 新編日本古典文学全集は、その頭注で、「この物語では、会話の中途にしばしば『と』が挿入される。『と』の前後で話題が転換することを示す用法。」と説き、「『…』といい、続けて、『…』」という形の訳を示している。「〜とか〜とか」という訳に比して、一拍の間を置いた解釈と言えようか。

「〜とか〜とか」「〜と言い、続けて〜」、どちらの訳を与えるかはともかく、このような《「…」と、「…」》型の文は、『落窪物語』『うつほ物語』をはじめ『蜻蛉日記』『枕草子』『和泉式部物語』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』『讃岐典侍日記』などを研究する者には目馴れたものであろう。その一方、不思議なことに、『源氏物語』には、この種の「と」が稀にしか現出しない。たび重なる書写の過程でしだいに棄て去られて行ったのだろうか。或いは、現代の注釈者が見落しているのだろうか。

【用例3】『源氏物語』夕霧巻

「いとまた知らぬ世かな。憎くめざましと、人よりけに思しおとすらん身こそいみじけれ。いかで人にもことわらせむ」と、言はむ方もなしと思してのたまへば、さすがにいとほしうもあり。「また知らぬは、げに世づかぬ御心構へのけにこそはと。ことわりは、げに、いづ方にかは寄る人はべらんとすらむ」と、すこしうち笑ひぬ。

（『新編日本古典文学全集　源氏物語④』四六七頁）

夕霧と小少将［落葉宮付きの女房］との対話場面である。新編日本古典文学全集の本文をそのまま掲げた。「こそはと」について、頭注は、「『こそは（あれ）と』。下に『思ふ』ぐらいが続くべきところ、語尾をにごして、言いよどんだ。」と説明している。しかし、鉤括弧の付し方は、ミステイクと言わざるを得ない。平安和文において、発話者自らが「〜と。」と言いよどむ例が他にあるだろうか。先の【用例1】

【用例2】のごとく「と」を鉤括弧の外に出すべきであった。[5]

それにしても、何故、書き手は、わざわざ、一続きの発話の中途に「と」を差し挟んだのだろうか。確かに、右三例の「と」は、あってもなくても差し支えない、とさえ言い得る。ただ、時に、発話の狭間の「と」が、読者に対して有効に機能しているとおぼしい用例もある。

【用例4】『枕草子』跋

宮の御前に、うちのおとゞの参らせ給へりけるさうしを、

C「これに何をかゝまし。」

と、

C「うへの御前には史記といふ文をなん一部かゝせ給ふなり。古今をやかゝまし。」

などの給はせしを、

S「これ給て、枕にし侍らばや。」

とけいせしかば、

C「さらば、えよ。」

とて給はせたりしを、

（『能因本枕草子㊦　学習院大学蔵』笠間書院／二二六頁）

【用例5】『うつほ物語』初秋巻

仲忠、見つけられて、すべ（な）き心地して、しゐてかくるれど、おとゞ、みつけ給て、

K「めせば。などかくては物するや。参られよや。」

とのたまふ。

仲忠、

N「『やがてまかりでにけり』とそうせさせ給へ。」

と、

N「たゞいま、みだり心ち物にゝず、なやましくて、えおまへにさぶらふまじ。」

おとゞ、

K「見ぐるしき人にも有かな。……［以下略］

（『俊景本宇津保物語の研究②』ひたく書房／一五〇九頁）

あらかじめ付言しておくが、【用例4】以降、掲出する本文はすべて、影印本をもとに、私意により鉤括弧・句読点・濁点を付け、改行を施した、私による整定本文である。

前者【用例4】は、中宮彰子・清少納言が同座している場面。Cは中宮の発話、Sは清少納言の発話と読まれる。そして、その中宮の言の中途に「と」が置かれている。[6]

後者【用例5】は、仲忠と、父兼雅［おとゞ］との対話場面。Nが仲忠の発話、Kが兼雅の発話と読まれる。そして、その仲忠の言の中途に「と」が置かれている（この例では、《「…」と、「…」》の後に、発話を閉じる地の文がない。「同種格並立構文」とは呼び難い例である）。

さて、右二例で注目したいのは、それぞれ、「と」の直前が、「これに何をかゝまし」という疑問文であること、および、「そうせさせ給へ」という命令文であることだ。かような用例は他にも見出せる。恐らく、鉤括弧も句読点もない写

本を辿る読者たちは、疑問発話・命令発話を見たとき、「この後、もう一人の話主の返事が来るだろう」と予想するのが常であり、従って、「同じ話主の発言をまだ続けたい」と書き手が思ったときには、それを知らすべく、あえて「と」を置いた、……そう説明し得ようか（ここで言う「書き手」とは、原作者であっても書写者であっても構わない）。

或いは、【用例5】のごとく「『…給へ』と」と命令形で閉じられる例が他にも複数あることを鑑みると、もしかしたら、この文字列を「…給へど」という逆接に解した書写者がいたため、一見不要な「と」も除去されずに伝わった、という可能性もあろうか（現行の翻刻の中にも、「『…命令形』＋と」を、「…已然形＋ど」と誤解しているものがある）。

以上、【用例1】～【用例5】は、《「…」と、「…」》型発話文の典型例と言えるものである。なお、参考までに付記しておくと、「と」の代わりに「とて」を用いた同形態の文型も間々見られる。

【用例6】『落窪物語』巻三

「天下の鬼心の人も、えにくみたてまつらじ。」

とて、

「いとゞおほきにおはするは、いくつぞ？」

「三つに成侍ぬる。」

となん、ちゝ君申給へば、

（『長嘯室本落窪物語』和泉書院／二六七頁）

【用例7】『狭衣物語』巻第三之上

「さらにおぼえぬぞとよ。たしかに、たゞの給へ。なにのたよりぞ。」

と、今すこしち被き［＝近づき］給へば、

「いで、さらばこそ。ことの外にのたませつれども。」

とて、

「この御前の御はゝ、故平中納言のいもうとにはおはせずや。その御あねは、女院に中納言とてさぶらひ給しを、……［以下略］」

（『元和九年心也開板古活字本狭衣物語㊦』勉誠社／四〇三頁）

見られる通り、【用例6】では、孫を抱く中納言の発話の狭間に、また、【用例7】では、今姫君の母代の発話の狭間に、助詞「とて」が割り込んでいる。【用例1】～【用例5】で見た「と」と同様の機能を果していると言ってよい。

二、《「…」と、「…」》型の心内文

これに加えて、平安時代の日記・物語の中には、《「…」と、「…」》型の心内文も存在する。

【用例8】『蜻蛉日記』中巻

おこたりてときくに、まつほどすぐる心ちす。

「あやし。」

と、

「人しれずこよひを心みむ。」

と思ふほどに、はては、せうそくだになくて、ひさしくなりぬ。

（『在九州国文資料影印叢書　蜻蛉日記』刊行会／一〇八頁）

【用例9】『夜の寝覚』巻三

なをめづらかに、うく、うとましきに、

「いでや、かの御心がまへも、この人によるぞかし。」

と、

「まいて、『うちとけてなん』ときゝつけられたてまつりては、いかなる事かいでこん。」

と、いみじくおそろしけれど、

（『影印校注古典叢書　夜の寝覚③』新典社／一九六頁）

【用例10】『狭衣物語』巻第三之上

「かぎりなき御身の程といひながらも、我身は、などて、さばかりの哀をもかけられ奉るまじきぞ。」

と、

「あさからぬ御契のほども、おぼししるまじくやは。」

と、心うければ、おがみわたすにてもやみぬべけれど、

（『元和九年心也開板古活字本狭衣物語㊦』勉誠社／三六九頁）

形態こそ、前節で見た《…」と、「…」》型の発話文に同じいが、右三例は、一続きの心内であり、話主が紛れる心配はないはずであって、「**と**」の機能性（存在理由）はきわめて薄い。先に見た【用例2】のごとく、話題転換の「と」、もしくは、一拍の間を置く「と」、と考えておこう。

それにしても、【用例8】「『あやし』**と**」は（他の写本でもこうなっているのだが）、何故、「あやしう」と書かれなかったのだろうか。今は答えを持ち合せないが、直接話法／間接話法の問題（後述）を考える一助にはなるだろうか。

三、《「…」と、「…」》型で、話主が交替する例

第一節・第二節で見た《「…」と、「…」》型の発話文・心内文はすべて、一人物による一続きの言の中途に「と」が割り込んだものであった。平安和文における用例の大半は、このタイプである。しかし、それと同形態でありながら、「と」の直後で話主が交替してしまう例が、ごく稀に存在する。

【用例11】『更級日記』

別当とおぼしき人いできて、

B「そこは、さきの生に、このみてらのそうにてなむありし。……［中略］……このみだうの東におはする丈六の仏は、そこのつくりたりし也。はくをしさして、なくなりにしぞ。」

と。

S「あないみじ。さは、あれに、はくをしたてまつらむ。」

といへば、

（『日本名筆選　更級日記・藤原定家筆』二玄社／四四頁）

【用例12】『とりかへばや』巻三

いともいみじくきよらにてとはせ給ふに、いとかたじけ

なくなりて、
T「『うぢのわたりにおはします』とぞうけ給はる。」
と。
O「うぢは、いづくのほどぞ？」
T「式部卿の宮の御りやうとぞうけ給はりし。」
と申せば、
（『とりかへばや③　宮内庁書陵部蔵御所本』新典社／六四頁）

前者【用例11】は、別当らしき僧と作者との対話場面。作者の前世を語る別当の言B「そこは……なくなりにしぞ」の直後に、「**と**」が置かれている。そして、その次の言「あないみじ…」からは、作者Sの発話に移ったと読まれる。

後者【用例12】は、女装をやめた男君と、女君から遣わされた使者との対話場面。使者の言T「『うぢのわたりにおはする』とぞうけ給はる」の直後に、「**と**」が置かれている。そして、その次の言「うぢはいづくのほどぞ？」は、男君Oの発話と読まれる。

右二例は、《「…」と、「…」》型発話文のイレギュラータイプである。誤脱を想定したくもなるが、かような用例が存在しているとなると、第一節で述べた、「話主が交替しないことを示す『と』」という仮説は成り立たないことになる。

四、話主交替を明示しない発話文

平安時代の日記や物語では、地の文を挟まぬまま、話主Xの発話と話主Yの発話が連綴されることがしばしば行われる。鉤括弧も句読点もスペースも改行もない写本を辿る読者たちは、話主の変わり目・発話の閉じ目をどのように読み取ったのだろうか。[1] 本節以降は、発話文・心内文の閉じ目に「と」を用いない筆法について考えてゆく。

【用例13】『うつほ物語』楼の上・下巻

内侍のかみ、大将、
H「いとかたじけなき御ゆきを、いかゞつかうまつるべからん？」
T「もろこしのしふのなかに、こさうしに、所々ゑかき給て、哥よみて三巻ありしを、一巻を朱雀院に奉らん。」
H「嵯峨院にはいかゞ？」
との給へば、
T「こま笛をこのませ給めるに、もろこしの御かどの御返給けるに、給はせたるこま笛を奉らむ。上達部、れいのさほうの御よそほひあり。」
H「わかくおはします宮たちには？　なべてのさまにはあらず。」
T「いかで。おかしきさまならん物こそよからめ。」
と聞え給へば、
H「しかようゐして侍。」
とて、みな、さま〴〵にまいらせ給。

（『俊景本宇津保物語の研究③』ひたく書房／三七〇〇頁）

【用例14】『夜の寝覚』巻二

H「いつありけることぞ？　などいまゝでしらせさせ給はざりける？」

D「このつゐたちごろになむ、むまれ侍ける。」

H「はゝは、たれそ？」

D「『よも、くちおしきあたりには、いでまうでこじ』とおぼしめせ。」

ときこえ給へば、

H「さはれや。いふかひなききはなりとも、めづらしくさしいでたる、いとうれし。」

とのたまひて、

（『影印校注古典叢書　夜の寝覚②』新典社／一〇六頁）

改めて付言しておくが、掲げる用例は、鉤括弧・句読点・濁点を付し、行を改めた、私による整定本文である。

前者【用例13】は、仲忠の母H［内侍の督］が饗応について問い、息子の大将T［仲忠］がそれに答える場面。[8] 後者【用例14】は、主人公の母君Hが赤子について問い、息子の大納言D［男主人公］がそれに答える場面。

見られる通り、X→Y→X→Y…という話主の転換が、ほぼ発話の連続のみで展開している。写本で文字列を辿っているときには甚だしい困惑を覚えるが、よく見ると、「いかゞつかうまつるべからん？」「などいまゝでしらせさせ給はざりける？」「はゝは、たれそ？」等の疑問文の次で話主が交替するだろうと予測でき、かつ、「のたまふ／聞えたまふ」という敬語差から話主を推定し得る（両者とも、「聞え給ふ」の主語は息子、「のたまふ」の主語は母）ので、現行の注釈書に抗して、右のように鉤括弧を付した。[9]

以上は、登場人物二者による対話であるが、さらに悩ましいことに、無名の脇役たちが口々に物を言う、集団発話とでも称すべきものも、平安和文には多く存在する。

【用例15】『和泉式部物語』

人々、

「いでや。いとぞ、さまあしきや。」

「よの中のひとの、あさみ聞ゆる事よ。」

「まいりけるも、おはしましてこそむかへさせたまひけれ。」

「いとこそ、目もあやにこそはべなれ。」

「かのつぼねに侍なるべし。」

「ひるも三たび四度おはしますなり。」

「いとよし。しばしこらしきこえ給へ。あまりものきこえ給はぬは。」

など、にくみあへるに、

（『和泉式部全集　資料編』古典文庫／一二二頁）

【用例16】『源氏物語』夕霧巻

なやみ給人は、えきこえ給はず。

「なべてのせじがきは、ものしとおぼしぬべく。」
「ことぐしき御さまなり。」
と、人々きこゆれば、宮ぞ御返きこえ給。
（『大島本源氏物語⑦』角川書店／二四二頁）

【用例15】は、寵を奪われた北の方に仕える女房たちの言。『講談社文庫　和泉式部日記』（七七頁）が、これらすべてを一つの鉤括弧内に収めているのは論外として、『講談社学術文庫　和泉式部日記㊦』（一四九頁）の切り分け方ともいささか異なる私案となった。いわばエキストラたちの発話であるだけに、これと言う正解は決し難い。

一方、【用例16】は、一条御息所と落葉宮に仕える女房たちが、夕霧への対応に拱手して発した言。「人々」とあるので複数者の発話であることは明白なはずなのだが、現行の注釈書は、右の傍線部を一続きの言と解している。『新編日本古典文学全集　源氏物語④』（三九六頁）は、「通りいっぺんの代筆では、無礼なとお思いになりましょう。重々しいご身分の先方様ですから」と訳しており、他の注釈書も同様なのだけれども、誤読ではあるまいか。「ことぐし」は「大層な・大仰な」という意味であって、「重々しい」ではない。ここは、右の私案のように二つに分断したうえで、女房X「ありふれた代筆では、（夕霧さまは）気分を害しておしまいになりそうで。」・女房Y「（夕霧さまの贈り物は）なんとも仰々しい雰囲気なんですよ。」と、代る代る主人に訴えた発話と解するのがよい。これで、「ことぐし」を夕霧の形容ととるような無理を犯さずにすむ。

こうした集団発話は、平安時代の日記や物語にしばしば現れる。その場合、「人々」とか「…人、…人」とかいったメルクマールが必ず置かれている。写本を辿る読者たちは、作中のエキストラがそれぞれに言葉を発している映像を脳裡に浮かべて読んでいたに違いない。

五、発話文から地の文への緩やかな移行

第一節～第四節で考察したのは、どこまでが発話でどこから地なのか、比較的明瞭な用例であった。ここからは、「と」も「とて」も「と言へば」も使わず、発話文を緩やかに地の文へ移行させてゆく独自の筆法について考える。

【用例17】『浜松中納言物語』巻四

「いとたちまちに、さやうにもてなしむつびきこえんとはおもひより侍らぬを、かうきゝ侍りなば、そのほどは、いとゞこそつゝしむべかんなれ。
さて、こゝは、『かくてもなにゝかはせん。だうになさん』とおもふを、年かへりて、はるのころより、おぼしいそぎつくらすべき」やうなど、
くはしくいひをきたまふを、
（『浜松中納言物語④　国立国会図書館蔵』笠間書院／七九頁）

【用例18】『更級日記』

『「前略」……たけしばのをのこに、いけらむ世のかぎり、武蔵のくにをあづけとらせて、おほやけごともなさせじ。たゞ、宮にそのくにをあづけたてまつらせ』給よしの宣旨くだりにければ、

（『日本名筆選　更級日記・藤原定家筆』二玄社／二一頁）

こうした発話文が現出した場合、「カッコでくくれない」として放置する注釈書もあるようだが、右では、両者とも、無理を承知で強引に鉤括弧で閉じてある。

前者【用例17】は、吉野の聖に語りかける男主人公［中納言］の言。直接話法式に、

「……つくらすべし。」と、

という形で閉じることも可能だったろうが、右では、「べし」連体形を以て地の文に移行している。

後者【用例18】も同様で、直接話法式に、

『……あづけとらせよ。』との宣旨

という形で閉じることも可能だったろうが、語り手（里人）から宮への敬意により、「とらす」が「たてまつらす」に変換され、さらに、帝に対する敬語「給ふ」まで加わって地の文に移行している（つまり、帝が「……あづけたてまつらせ給へ。」と言ったわけではないので、『角川ソフィア文庫　更級日記』（一二二頁）の訳「『…預け申し上げなさる』との宣旨」や、『新編日本古典文学全集　更級日記』（二八六頁）の訳「『…お預けあそばそう』という宣旨」は不適切）。

多くの用例の中から任意の二例を掲げたに過ぎないが、構造としては、次のような型として認識できる。

「……**活用語の連体形**」＋**やう**

「……**活用語の連体形**」＋**よし**

しかして、かような筆法は、心内文にも用いられている。

【用例19】『狭衣物語』巻第三之上

「御うしろみの、いとさかしく、かたはらいたきさましたるもてなしに、……［中略］……

かうまで心をくれおもひやりなきはざ［＝わざ］しいで給べし、とはおもはざりける我こゝろさへ、くちおしき」までぞ思ひしられ給ぬる。

（『元和九年心也開板古活字本狭衣物語㊦』勉誠社／三九六頁）

今姫君の愚鈍ぶりを見て、母代や洞院上の人間性まで疑っている狭衣大将の心内。閉じ目のところは、直接話法式に、

「……くちおし。」とまで

という形で閉じることもできたろうが、「と」を用いず、「くちおし」連体形を以て地の文に移行している。構造としては、先の二例と同じく、次のような型として認識できる。

「……**活用語の連体形**」＋**まで**

任意の三例を挙げるに留めるが、平安時代の日記や物語では、《「…」＋と》という基本形以外に、右のような形で発話文・心内文を叙することが、何の抵抗もなく行われ得た、ということだ（かような筆法は、古記録や書状にも散在する）。「い

つのまにか地の文に移っている」わけでもないし、「物語作者の巧みな語り口」でもない。一回的な口語表現にも似た、無意識裡の移行と言うべきだろう。

六、心内文から地の文への緩やかな移行

地の文から心内文へ、心内文から地の文へ、その境を曖昧にしながら連綴される『源氏物語』の文体については、夙に中島広足『海人のくゞつ』が「うつり詞」と称して指摘したのをはじめ、島津久基『対訳源氏物語講話』が「主観直叙」「客観的移用」と称して解読を試みており、近年は、石田穣二・秋山虔らが積極的に両論を言挙げする一方、「語り手」「視点人物」「表現主体」「話法」「言説」といった観点による論稿が簇出している、といった情況である。[10]

ただし、本稿では、いわゆる「語り手」や「視点人物」の議論には踏み込まない。問題にしたいのは、心内文から地の文へ緩やかに移行する用例につき、多くの『源氏』研究者が「いつのまにか地の文に移っている」と評している、その「いつ」という点である。

【用例20】『源氏物語』浮舟巻

御心のうちには、

「いかにして、この人を、みし人かともみさだめむ。かのきみの、さばかりにてすへたるは、なべてのよろし人にはあらじ。

このわたりには、いかでうとからぬにかはあらむ。心をかはしてかくしたまへりけるも、いとねたう」おぼゆ。たゞそのことを、このごろは、おぼしゝみたり。

（『東海大学蔵桃園文庫影印叢書　源氏物語（明融本）Ⅱ』東海大学出版会／五五六頁～）

浮舟とそれを囲う薫について思いを巡らす、匂宮の心内。かような筆法は、平安和文に頻出するものだが、多くの現代人は、「ねたうおぼゆ」辺りにねじれがあるように感じるだろう。右では、強引に鉤括弧で閉じた。いわば、直接話法のように始められながら間接話法のように閉じられているわけで、その理解の仕方については、夙に、佐伯梅友が明快な指針を示している。[11] すなわち、

「…**形容詞の終止形**」＋**と**＋**おもふ（おぼゆ）**

という型なら直接話法式、

「…**形容詞の連用形**」＋**おもふ（おぼゆ）**

という型なら間接話法式、と認識できる。右の例で言えば、「『…いとねたう』おぼゆ。」は、「『…いとねたし』とおぼゆ。」と等価ということである。本文を整定する際には、不自然ではあるけれども、「おもふ（おぼゆ）」直前で鉤括弧を閉じればよい。

右の型の場合は、「おもふ」「おぼす」「おぼゆ」がマークとなっているので検出しやすい。しかし、以下のような型は、これまで考覈されたことがあったか、否か。

【用例21】『源氏物語』東屋巻

［前略］……」

と、心にもあらずひとりごち給ふをきゝて、いとゞ、しぼるばかり、あま君の袖もなきぬらすを、わかき人、

「あやしうみぐるしきよかな。●

こゝろ行みちに、いとむつかしきことそひたる」心ちす。しのびがたげなるはなすゝりをきゝ給て、

（『大島本源氏物語⑩』角川書店／一五一頁～）

【用例22】『源氏物語』手習巻

例のかたにおはして、かみはあま君のみけづり給を、

「こと人に、てふれさせんも、うたて」おぼゆるに、てづから、はた、えせぬことなれば、たゞすこしときくだして、

「おやに、今一たび、かうながらのさまをみえずなりなむこそ、人やりならず、いとかなしけれ。◆

いたうわづらひしけにや、かみも、すこしおちほそりたる」心ちすれど、

なにばかりもおとろへず、いとおほくて、

（『大島本源氏物語⑩』角川書店／四二五頁～）

前者【用例21】は、薫の独詠を聞いて涙する尼君の様子と、当惑する侍従［わかき人］の心内を叙したくだり。鉤括弧は、私の独断で付した。『源氏物語の鑑賞と基礎知識　東屋』（二一六頁）は、「このあたりは、侍従の心中がそのまま地の文につながっている」と注し、右の●印のところに助詞「と」を補う恰好で、「わけの分からない見苦しい有様だ**と**、」と訳しているのだけれども、如何か。あまつさえ、『日本古典文学大系　源氏物語⑤』（一九三頁）は、●印のところに、底本にない「と」を補って本文を立てている。[12]

後者【用例22】は、心を閉ざして小野の地に暮す浮舟の心内を叙したくだり。鉤括弧は、私の独断で付した。『新編日本古典文学全集　源氏物語⑥』（三三四頁）は、「『親にいま…』以下『いと悲しけれ』まで浮舟の心。次の『いたう…』以下の地の文に直接続く」と説き、◆印のところに切れ目を見出しているのだが、如何か。一方、『新潮日本古典集成　源氏物語⑧』（二三三頁）は、「…以下、浮舟の心。文末は、いつか地の文になっている」と説いている。[13]

これまで、多くの『源氏』研究者が、右のような例に対して、「いつか自然に地の文に融け込んでいる」とか「どこまでが心内か判然としない」とか「語り手の視点と作中人物の視点が一体化している」とか称して来たわけだが、そこで挙げられた用例の相当数が「…心地す」という語を含んでいることに、何故、留意されなかったのか。この文型は、『源氏物語』のみならず『和泉式部物語』『狭衣物語』『夜の寝覚』などにおいて、枚挙に遑がない。すなわち、平安和文にあっては、

「…」＋と＋おぼゆ

の代わりに、

「…活用語の連体形」＋心地す

という型でも心内文を書き表し得た、ということである。次の叙述は、それを裏付ける適例と言えよう。

【用例23】『狭衣物語』巻二

又、かゝるおもひしかさなりぬれば、あさましく、むねくるしきに、

「さりとて、たちまちにうへの御心にしたがふべき」心ちもせず、

「さて、此まゝにてやみなん」ともおぼえず、

さまゞ〳〵にみだれまさりぬる御心の中、

（『さごろも②　宝玲本』古典文庫／三五頁）

傍線部に見られる通り、《「…活用語の連体形」＋心地す》型の心内文と、《「…」＋と＋おぼゆ》型の心内文とが、「も」によって並立している。[14] 両者が等価の機能性を持っていることは、もはや明らかだ。これは、心内文を叙する際の一つの構文なのであって、「語りのテクニック」だの「融通無碍の文体」だのという評は当らない。こうした文型が現出した場合は、不自然ではあるけれども、「心地」の直前で鉤括弧を閉じ、「『…ている』心地がする」などと訳せばよい。

本来的には、「心地す」という語は、

まことに上陽宮といひけん心地して

（『我身にたどる姫君』巻一）

水に数かゝんよりもあとなき心地す

（『石清水物語』上巻）

のごとく、「〜のような気がする」という程度の使われ方をするのが通常だろう。その、「〜のような」の部分が、長くなり複数の文になると、人は、「心内文がいつのまにか地の文に移っている」と感じるわけだろう。

以上、第一節から第五節まで、平安和文における、発話／地／心内の叙法について考察した。[15]

そもそも、中島広足は、すべてを割り切って論定する本居宣長に抗して「うつり詞」の論を物したわけで、それを再び割り切り可能であるように説く本稿は、当然、譏弾の対象となろう。もちろん、本稿で取り上げた文型によって心内文のすべてが解釈できるわけではいささかもなく、語り手（カメラ）と作中人物の心（アイ）が重なってしまったような文も確かに存在する。ただ、解析可能な構文まで判断中止にする必要はない。加えて、今回検討した事柄は、現代人がどこまで割り切って分析できるか、というに留まらぬ問題性を持っている。『うつほ物語』『枕草子』『源氏物語』『和泉式部物語』などの諸本を見比べていると、写本によっては、引用の助詞「と」を補入したり抹消したり、さらには、間接話法式の文を直接話法式に改めたりするような異同が多く検知されるのである。[16]（今回は、そのうちの二・三を、註に記しておいた）。

今後は、『源氏物語』のみを特立した言説分析などは抛棄し、平安和文（及び、変体漢文）全体を俯瞰して、諸本の本文揺動や各写本の書き入れまで視野に収めた、読者論・享受論としての和文分析が要請されよう。

付節、「&」としての「と」

蛇足ながら、ここまでで考察した、発話／地／心内の問題とは全く別に、「&」を意味する「と」についても、今後の参考のために述べ添えておきたい。

現代語における用法については、既に、半藤英明「並立助詞「と」「や」」（『日本語助詞の文法』新典社・二〇〇六年）が論じている。ただ、そこでは、

1，《XとY》型　（例・「イチゴとバナナ」）
2，《XとYと》型　（例・「イチゴとバナナと」）

の二種が取り挙げられるのみで、次の型への言及はない。

3，《XYと》型　（例・「イチゴバナナと」）

この3の型は、平安和文に散見するもので、例えば、以下のような用例を拾うことができる。

【用例イ】『うつほ物語』国譲・下巻

物見車、大将、中納言**と**を、見ていふやう、
「これは、なだゝりし、すゞし・なかたゞぞな。めでたくもなりまさりたるかな。」といふ。
（『俊景本宇津保物語と研究③』ひたく書房／三〇八五頁）

【用例ロ】『蜻蛉日記』上巻

七月になりて、すまひのころ、ふるき、あたらしき**と**、ひとくだりづゝひきつゝみて、
（『在九州国文資料影印叢書　蜻蛉日記』刊行会／一三頁）

【用例ハ】『更級日記』

あそび三人、いづくよりともなくいできたり。五十許なるひとり、二十許なる、十四五なる**と**、あり。
（『日本名筆選　更級日記・藤原定家筆』二玄社／二五頁）

ちなみに、【用例イ】俊景本『うつほ物語』の「と」は、本行本文にはなく、朱で補入されたものである。前田本や浜田本等にはこの「と」が存在するので、校合による書き入れと目されるが、そうなると、「&」を表す用法としては、次の四つめの型も想定しておく必要が生じる。

4，《XY》型　（例・「イチゴバナナ」）

いわば、「と」を用いない並列である。『うつほ物語』には、この4の筆法で複数の事物人物が記されることが実に多い。本稿・第四節で掲げた【用例13】中に、「内侍のかみ、大将、」とあったのも、この用法と認められる。

ところで、本稿前半では、《「…」と、「…」》という文型について考察したわけだが、発話や心内の中途に割り込んでいた「と」は、引用の助詞ではなくして、或いは、この、「&」を意味する「と」なのかも知れない、という気もして来る。

註

(1)本文解釈・本文整定については、以下の拙稿でも述べた。
加藤昌嘉「「を」の気脈―『源氏物語』の句読と異同―」(『語文』80＋81・二〇〇四年二月)
加藤昌嘉「句読を切る。本文を改める。」(伊井春樹監修『講座源氏物語研究⑧―ことばと表現―』おうふう・近刊予定)

(2)『落窪物語注釈』(六九一頁)・『新編日本古典文学全集　落窪物語』(二〇三頁)・『新日本古典文学大系　落窪物語』(二五七頁)等を参照のこと。右のうち、『注釈』と『新編全集』の解釈には賛成しない。

(3)中村幸弘＋碁石雅利「Sem I-9　同じ格は並立されるか?」(『古典語の構文』おうふう・二〇〇〇年)
ただ、後掲の【用例5】のごとく、必ずしも、《〜と、〜と》という並立をなさないものも多い。

(4)なお、【用例1】の場合、『落窪物語』諸本は共通して「と」を持っているようであるが、【用例2】の場合は、『うつほ物語』諸本の中でも「と」を持たない写本が存在する(俊景本等)。こうした「と」は、いわば、書写者の匙加減で付け足すことも取り去ることも自由であったと考えられる。

(5)【用例3】として掲げた新編日本古典文学全集の他、『源氏物語の鑑賞と基礎知識　夕霧』(一九八頁)・『新日本古典文学大系源氏物語④』(一四〇頁)・『新潮日本古典集成　源氏物語⑥』(七七頁)等、いずれも、この「と」を鉤括弧の中(発話の中)に入れたままにしている。
ちなみに、『源氏物語』諸本のうち、保坂本は、この「と」を持たない。

(6)なお、【用例6】として掲げた『枕草子』は、《能因本》にグルーピングされる学習院大学本の本文であるのだが、一方、《三巻本》にグルーピングされる諸本を見ると、前後に少なからぬ異同があり、かつ、当該の「と」を持っていない。こういう場合、『枕草子』オリジナルがどのような本文であったかという問題は無視してよい。それぞれの写本の語法に従って読めばよい。

(7)室城秀之「地券のゆくえ―『落窪物語』の会話文―」(『国語と国文学』二〇〇五年五月)は、切れ目の紛らわしい発話文を考察する中で、「このような会話の展開を、句読点も、「　」もない写本で、古代の人々はどうして読むことができたのか。」というプリミティヴな問いを投げかけている。本稿の考察は、それに対するいささかの解答になり得るだろうか。

(8)ちなみに、【用例13】の冒頭「内侍のかみ、大将、」という箇所、現行の『うつほ物語』注釈書はすべて、「内侍のかみ、大将に、」と、格助詞「に」を補っているのだが、不要の処置である。このくだりでは、「内侍の督が　大将に　〜と言う」という格関係は成立していないはずだ。ここは、「内侍のかみと、大将とが、」というような意で、以下の会話場面における話主名を明示したに過ぎないと思われる。諸本の本文のまま「内侍のかみ、大将、」と定めておいて問題はない。

(9)【用例13】の九行目「こま笛」から一三行目「よからめ」まで、掲出した私案では、三つに分割した(内侍の督が「幼い宮たちには何を?」と問い、仲忠が「可愛い物がいいでしょう」と答えた対話と解した)。一方、現行の『うつほ物語』注釈書は、すべてを大将(仲忠)の発話として一括りにしている。本文に傷があるような気もする。後考を俟ちたい。

(10)以下の論稿・論集を参照。
石田穣二「注釈についての二、三の提言」(『源氏物語攷その他』笠間書院・一九八九年)
秋山虔「「うつり詞」ということ」(『むらさき』21・一九八四年七月)
『日本文学研究資料新集⑤　源氏物語　語りと表現』(有精堂・一九九一年)
なお、以下の二論は、広く平安時代文章史・平安和文書記史の中で多種の用例を検討しており、参考になる。
池田和臣「源氏物語の文体形成―仮名消息と仮名文の表記―」(『国語と国文学』二〇〇二年二月)
小田勝「9.4　引用」(『古典文法読本』開成出版・二〇〇四年)
(11)佐伯梅友「直接話法と間接話法」(『上代国語法研究』大東文化大学東洋研究所・一九六六年)
(12)『日本古典文学大系　源氏物語⑤』は、底本にない「と」を東山御文庫本(御物本)によって補ったと言う(一九三頁、四六八頁)。『源氏物語大成』(一八四八頁)によると、御物本と保坂本は、「あやしうみぐるしきよかな**と**」という本文を持っており、ここで心内文が閉じられることになる。
(13)ちなみに、【用例22】で「おやに、今一たび、かうながらのさまをみえずなりなむこそ、人やりならず、いとかなしけれ。」とある箇所は、歴博本では、「『おやに、いま一たび、かくながらのさまを見えざらんこそ』**と**、人やりならず、かなし。」となっている。助詞「と」を用いて、直接話法式に閉じているのだ。加えて、【用例22】で「『…かみも、すこしおちほそりたる』心ちすれど」とあった箇所は、歴博本では、「かみも、すこしおちほそりにたれど、」となっている。「…心地す」が存在しないのだ(以上、『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書　文学篇⑱　物語③』二五三頁)。いずれの本文が古いかという問題を無視するとしても、遅くとも一四世紀の段階で既に、現代人が困惑するのと同じ箇所(「心地」という語と、その直前)で、読者の介在による本文揺動が生じていたことが窺知される。
(14)『校本狭衣物語②』(七〇頁)を閲すると、【用例23】のくだりにはいささかならぬ異同があって、《「…」心地》と《「…」とおぼゆ》という並立が成り立つ本文を持つのは、挙例の宝玲本の他、内閣文庫本・四季本など数種に限られるようである。
(15)なお、現代日本語における、引用の問題・助詞「と」の問題については、次の論著が包括的である。
藤田保幸『国語引用構文の研究』(和泉書院・二〇〇〇年)
(16)例えば、『源氏物語湖月抄』や、三条西家本『和泉式部日記』における「と」「など」の増加現象は、検覈に値しよう。

※【用例4】以降【用例ハ】まで、掲出した本文は、影印本をもとに、私に句読点・濁点・鉤括弧を付け、改行を施した、私による整定本文である。なお、漢字・仮名の表記は、底本のまま保存してある。

(かとう・まさよし　国文学研究資料館助教授)